

コツコツ積み上げての初V

「取って見たかった大きなタイトル」

通算2アンダー 142

東海大九州4年 山田玄彩



【写真は優勝の山田（左から2人目）と東海大九州の上位の選手たち】

1日2ラウンド、36ホールで争われる男子学生。第1ラウンドで山田はチームメートの中野、溝部とともにパープレー72、首位で折り返した。6バーディー、4ボギー、1ダブルボギー。トップだが、内容が良くない。そこで第2ラウンドに向かう前に考えた。「自分の調子とコースの状態を分析して計画を立てました。『ボギーを打たないようにしよう』と」。第2ラウンドは3バーディー、1ボギーの70。計算通りのゴルフを展開して、初のタイトルに手が届いた。思ったようなゴルフはそうはできないものだが、勝つときはこんなものかもしれない。ただ、考えを可能にする実力がなければ難しい。

「大きなタイトルを取って見たかったので、本当に嬉しい」と喜びを表す。学生の試合ではこれまで何度となく勝ってはいるが、九州ゴルフ連盟（GUK）主催の競技は初めて。最終学年での優勝はまた格別である。

長崎県出身。ゴルフは小学3年から始めた。父は柔道、母は陸上の経験があり「何かスポ

ーツを」と両親から勧められて、山田はゴルフを選んだ。石川遼の特集をテレビで見たのがきっかけ。それからコツコツと練習に励む。「親と二人三脚でした」。高校は進学校の長崎東。国体少年の長崎代表に選ばれるが、「県内レベル」。東海大九州に進んでも入学時のゴルフ部内のランクは一番下の「C」。しかし、そこから努力を重ねた。ドライバーの飛距離も入学時の260ヤードから290ヤードに伸び、チーム内ではエース格となった。

「ゴルフに打ち込み、充実した3年間でした」と山田がこれまでの大学生活を振り返る。最上級生となり、九州学生チャンピオンとして8月の日本学生に臨む。「トップ10以内を目指し、優勝争いに加わりたい」。6月の日本アマの出場も決まっており、プロテストも控える。大学生活最後の2023年は山田にとって忙しい年になる。

玄彩という名前は「中身の詰まった玄米」の「玄」と「自分の色に人生を染めてほしい」との「彩」を肉親から贈られた。その名前を全国に披露する。

沖縄国際大初の学生女王

モトクロスからゴルフへ

2 オーバー 74

沖縄国際大4年 仲村姫乃



【写真は優勝の仲村（右から2人目）とチームメート。左端は呉監督】

これまで沖縄の大学からの女性チャンピオンは数人いるが、沖縄国際大からは初めてとなる。「最後の2つのボギーで優勝はあきらめていました。去年は2位で悔しい思いをしたので嬉しい。今日は風も読みづらかったし、耐えるゴルフでした」。仲村は16番までパープレーで回っていたが、17番ショートで第1打を左奥に外し、18番ミドルでは第2打をグリーン左のバンカーに入れて、ともにボギー。それまで8個の1パットパーでしのいでいたが、上がり2ホールで手痛いミスをした。ガックリと肩を落としていた仲村への優勝のアナウンスはまさに朗報であった

沖縄県宜野湾市生まれ。父・忠さんの影響で5歳からモトクロス始める。きょうだい4人（男3人）ともこの競技に夢中になり、仲村自身も「この道でいこう」と心に決めていたところ、祖父から「女の子は危ない。ゴルフをやりなさい」とクラブを持つようになる。モトクロスのお陰で安定したバランスが取れており、それがゴルフに役立つという。今でもバランスボールの上に乗ってスイングができるほど。自分自身を「ショットメーカー。常にブレない軌道でできる」と言うくらいショットに自信を持つ。

普天間高1年からプロを目指してゴルフに集中するが、「もっと知識とかゴルフに関係する学問を学びたい」と沖縄国際大に進学。ここではメンタルを強くするカリキュラムなども生まれ、「ゴルフに生かしている」と仲村のゴルフの幅は広がり、今回の優勝の手助けとなった。

日本学生は昨年初めて出場して23位タイ。「気合が入り過ぎてしまいました。悔しい思いをしたので、今回はスコアを出して優勝を目指したい」。モトクロスで培ったバランス力を生かして、昨年のリベンジを図る。

《愛野カントリー倶楽部》



